まだ三十に滿たぬ青年僧とはいへ、持戒堅固の高德叡澄が、すでに一乘止觀院を建てて、ひたすら鎭護國家の祈禱に餘念ないといふうわさが、いつとはなく側近の者より聞し召されてゐた天皇は、新京の造營が魔事なく完成するために、まづ最初に比叡山に除災、招福の祈願を、とり行はしめられたまふたのであつた。けだしかの一乘止觀院の初度供養會こそ、いまだ名もなき比叡山をして、まさしく鎭護國家の道場たらしめたと共に、二十八歳のいまだ若輩の叡澄をして、一躍天下の名僧たらしめたのであつた。

『聖皇この地を選び、高祖わが山を卜す。世智と道眼と、互に精神を通じ、天象と地祇と共に函蓋を得たり。故に佛法は王法をまもり、王法は神法を崇め、永く皇帝本命の道場を建てて、ひとへに國家鎭護の精誠を嚴かにす。』

とは、『四明安全義』の作者のことばであるが、かくしてわが比叡山は、文字通り鎭護國家の道場となつたのである。

七、法華十講

延曆十六年、春まだ淺き二月の半ば、師匠の行表和尚は、病のため七十を一期として、掩然として世を去つた。叡澄の悲痛はどんなに深いものであつたかは、けだし想像に難くない。みづから剃髮の師匠となつて、けふの日まで、陰に陽に、何くれとなく、わが身のことをおもひ患つてくれた師恩を憶ふにつけても、叡澄は、いまさらながら會者定離の悲しみと、愛別離苦の苦しみを、まざ〳〵味つたことであらう。おのれの修行と、山上の經營のために、本意なくも

ときをりの音信さへも怠りがちであつた、わが身を省みては、惻々たる思慕と、切々たる悲痛に堪へられなかつたことであらう。だが、彼はけつしてそれによつて發願の初志を穢さなかつた。愛別離苦の惱みを、ぢつとおのれの胸におさめて、山を下らず、しづかに亡き師の冥福をいのりつつ、ひたすら師恩に報ゆるために、一層固い覺悟をもつて、所期の目的に向つて進んでいつたのであつた。

かくてその年の十二月十日、突然、朝廷から叡澄を、『內供奉十禪師に補する』といふ通知が、山上に齎らされた。

かれの感激はいかばかりであつたらう。といふのは、元來、この內供奉十禪師は、內供または十禪師とも稱し、

當時、學德一世に並びなき高德のうちから選ばれて、天皇の側近に奉仕する、きわめて光榮ある位地である。まだ三十一歳の年若い身空で、この榮位につくといふのは、まつたく破天荒であつた。それに江近の延稅を以て叡山に賜ふといふ恩命に接したのであるから、叡澄の欣びが、どんなに深いものであつたかは、あへて想像にかたくない。

あくる年の冬十一月、叡澄ははじめておのれの住房、止觀院において『法華十講』を修した。これは『霜月會』と稱して、いまに絕えず行はれてゐる叡山の年中行事の一つであるが、叡澄はつね日頃敬慕し讃仰せる、天台宗の開祖、智者大師への報恩感謝のまことを、表はさんがために、まづはじめこの法會をおごそかに修したのであつた。いつたいこの『法華十講』といふのは、法華三部經といはれてゐる、『無量義經』一卷『法華經』八卷『普賢觀經』一卷

あはせて十卷の經典を、讀誦し講讃する法會で、それが、三十二歳のとき、自覺の信念がさだまり、まさに衆生救濟の化他門に出づるその第一歩に行はれたといふことは、まことに意義ふかきことであつて、傳敎大師の生涯の歴史において、まさしく特筆大書すべきことであるといつていい。

この歴史的な法會が、はじめて修せられてから四年の後、すなはち延暦二十年十一月、さらに劃期的な法會が、雪ふかき比叡の山で催された。それは南都七大寺の高僧を招じての法華十講である。そのとき七大寺の十人の大德に送られた招待狀、卽ち『請十大德書』には、次の言葉がしるされてあつた。

「叡山の最澄、十大德の足下に稽首和南す。最澄、法華を傳へたてまつる深心大願を發起す。まことに願くは、有緣の厚願を蒙り、天台の敎迹を敷かんと欲す。もし通告をゆるさば、この文に答へて寶號を署したまへ。」云々

自分はかねて法華經をつたへ、天台の法門を親しくわが國に弘めやうといふ大願を發した。どうぞ御承諾を、お願ひいたしたいといふのである。

かくてこの招待狀をうけとつた、南都七大寺の大德は、快く最澄の懇請に應じ、相ついで登山し、その年の十一月十四日から二十三日までの十日間、熱心におのれの學殖を傾けて、それ〳〵法華三部經を一軸づつ講讃したのであつた。

八、高雄山の講演

むかしから京都には紅葉の名所が多い。なかでも

特に名高いのは洛西高尾の紅葉である。高尾、栂尾、槇尾、これを『三尾』といつてゐるが、この紅葉の名所として世間に知られてゐる高尾が、まさしく高雄山で、この高雄山こそ平安佛敎の産んだ巨星、傳敎、弘法の兩大師とは、きはめて因緣がふかいばかりでなく、わが國古今の忠臣和氣淸麿公とも、また密接な關係があるのである。

『神威をたうとび申して、河内國に寺を立て、神願寺といふ。後に高雄の山に移し立つ。今の神護寺これなり。』

と、『神皇正統記』にいつてゐるやうに、和氣淸麿が、勅命を奉じて宇佐に參向したとき、八幡宮の神威を尊び、それを勸請して延暦年中、桓武天皇の勅許を得て、河内國に神願寺を建てた。ところが平安遷都とともに、それを山城の高雄山に移し、改めて神護寺と名づけた。それがそも〳〵高雄山寺、すなはちいまの神護寺の由來である。

いつたい奈良朝の佛敎といへば、すぐにかの弓削道鏡をおもひ起すが、護國の忠臣和氣淸麿も、實は熱心な佛敎徒であつた。だが、このこと知つてゐる人は割合に少い。今日からいへば、神威をたふとび、神への謝恩のために、お寺を建てるといふことは、いかにも不思議に思へるが、むかしの日本人にとつては、神を崇ぶことと、佛を拜むこととは、決して矛盾しなかつた。敬神は崇佛であり、崇佛はそのまゝ敬神であつた。敬神と崇佛とは、けつきよく二にして一であつた。

話はつい横道へ外れたが、かやうなわけで、高雄山寺はできたのであるが、この寺で、延暦二十一年の春、はじめて最澄法師を講師として、さかんな法

華三大部の講演が催ふされたのである。發願の主は清麿の子、大學頭、和氣弘世と、その弟、參議和氣眞綱であつた。尤もそのときには南都七大寺の代表的學者たちへも、それ〴〵招待狀が發せられた。善議、勝猷、奉基、寵忍、賢玉、勤操、修圓、慈誥、玄耀、歳光、道證、光證、觀敏など、これら人々は、かつて最澄の特請によつて、比叡山に登り、法華十講に出仕した人たちで、いづれも當時の佛教界に於ける代表的學者であるが、みな喜んでこの講演に列したのであつた。

こゝでちよつと申添へておかねばならぬことは、和氣氏と最澄との關係である、これについて斯界の權威辻善之助博士は、『國史における傳教大師の地位』といふ論文のうちで、かういつてゐる。

「やがて桓武天皇が卽位あらせられ、これらの僧侶寺院にたいして、嚴重な取締を行はれ、奈良の佛教徒を抑へられた。天皇の御考へでは、奈良の僧侶寺院は、もはや用ふに足らぬのみならず、却つて大いに害がある。之を改良しやうとすると、到底ものにならず。卽ち之をそのまゝ振り捨てられたのであらう。

それが爲に、奈良の都を去り、山城へ遷され、僧侶寺院等を奈良に置き去りにせられた。平安遷都の原因は、種々の理由があることながら、この宗教政策卽ち文化政策による寺院僧侶を捨てることが、一つの大なる原因であつた。」

と、平安遷都についての原因をのべ、次に和氣清麿と傳教大師との關係について、

「かくて都を遷されて、さらに彼等僧侶寺院に代るべき、新しいものを求められた。そのために京都に

東寺、西寺を作り、また近江に梵釋寺などを作られた。然しながら、此等を以てはまだ十分なりとはいへない。この時に當つて、最澄傳教大師が出られたのである。

この傳教大師を見つけ出して、之を桓武天皇に薦め奉つたのは、何人であるかといふに、予は種々の理由より考へて、和氣清麿であらうと思ふ。

清麿はさきに道鏡を排斥するに當つて、身を捨てゝ大功を立てた。彼は奈良の僧侶寺院が弊害の多きことを熟知してゐる。故に桓武天皇の卽位の後、山城の長岡へ遷都のことあり、急卒にその業を進むる最中に、その經營に從事したる藤原種繼の暗殺事件あり、事頓挫したが、清麿は天皇に勸めて、平安遷都のことを起した。

かくの如く、清麿は樞機に參じ、天皇と肝膽相照すともいふべき地位にあり。故に奈良の僧侶をふり捨てゝ、その代りを求めんとする時にあたり、必ずや天皇の諮詢に與つて、大いに畫策する所があつたに相違ない。この時に當つて、清麿は傳教大師を求め得て、之を登用することを勸め奉つたことと思ふ。」云々。

おそらくこれが眞相であるやうにおもはれる。

父清麿の遺志をうけついだ弘世、眞綱の兄弟は、また熱心な最澄の崇拜者であつた。つねに最澄を訪れては佛の道をきいた。したがつて、その天台の法門にいつては、非常な憧れを抱いてゐた。それは高雄山の講演について、彼の最澄へ送つた書簡が、雄辯にそれを裏書してゐる。

「弟子弘世、比叡の大忍辱者禪儀に稽首和南す。この高雄の法會に、厚く恩誨を蒙つて、頓根を

勸め勵まし、聖德を憑み仰いで、この事を奏さんと欲す。然るにこのたびの會は、ただ世間つねに修する功德のことにあらず、委曲の趣は、元來照したまへる所なり。故に仙儀を仰ぎ望んで、專らこの會の主とせんとす。伏して乞ふ。大慈必ず哀愍をたれて、夏始まるの明日、高雄に降臨して、預め指揮を加へたまへ。聖容を相待つこと、これ深くたのむ所なり。種々の事は、まのあたり量定し奉るべし。さらに一二ならず。

千載の永例今度始むべし。奉面にあらざるよりは、每事疑多からん。乞ふ。必ず降臨して、佛日を興隆したまへ。」

これが最澄法師の住所へ屆けられた、和氣兄弟の書簡であつた。

「唯だ世間に常に修する功德の事に非ず。」

としるされてゐる以上、それが單なる祈禱や佛事ではなく、まさしく天台の法門を宣揚することが、ほんとの目的であつたことがわかる。

ところがこの和氣兄弟の發願にかゝる、高雄山寺の講經は、はからずも異常な反響があつた。

最澄の入唐留學も、實はこゝにその端を發するのであるが、畏くも　桓武天皇は同年八月二十九日、治部大輔和氣入鹿に勅して、口宣を下したまふたのである。

『昔、給孤の須達は、能仁を祇陀の苑に降し、求法の常啼は、般若を尋香の城にきく。是を以て、和氣朝臣は、二六の龍象を延て、一會の法筵を設け、天台の法華玄義を演暢す。所以に慧日光を增し、禪河流を激す。一乘の玄猷はじめて城內にひらき、三學の規範、ついに人天に被むる。像季の傳燈、古今いまだ聞かず。法筵に隨喜し、功德を稱歎す。』

和氣兄弟の悅びはいふまでもない。講師最澄の光榮これに過ぐるものはない。相ともに天恩の渥きに感激し、粉骨碎身、以て君恩に答へるために、一乘の妙法を弘宣せんと、ふかく心に誓つたことであつた。

話代つて、その法筵を聽いた南都七大寺の學匠たちに、どんなにふかい感銘を與へたかといふに、それは善議大德（七十三歲）の謝表の文によつて、十分に察知されるの　。

「沙門善議等言す。今月二十九日、治部大輔正五位和氣朝臣入鹿宣を奉ず。口勅したまはく。

法華の新玄疏を山寺に講說することを聞こしめして、一乘に隨喜したまふと。釋侶つつしんで慈詔を奉じ、喜懼懷に交はる。あらゆる緇徒、慶歡に勝へず。善議等きく。如來西に現はれて、衆生の機に隨ひて敎へを宣ぶ。聖法東漸し、緣感の時によつて、化を流す。是を以て、始めに華嚴の說を演べ、頓に菩薩の衆を度し、次に阿含の敎へを開いて、漸く聲聞の徒をすくふ。また般若の理を啓いて、以て人法の空を示し。後に法華の妙を弘めて、權實の趣を分つ。遂に三乘の輩をすべて共に一圓の車に載す。……

竊に天台の玄疏を見るに、釋迦一代の敎へを總括して、悉くその趣を顯はすに、所として通ぜずといふことなし。獨り諸宗をこえて、殊に一道を示す。その中に說く所の甚深の妙理は、七箇の大寺、六宗の學生、昔よりいまだ聞かざるところ、かつて未だ見ざるところなり。三論、法相久年の

諍ひ、渙焉として氷釋し、照然として既に明らかなり。猶し雲霧を披いて、三光を見るが如し。聖德の弘化より以降、今に二百餘年の間、講ぜらるゝところの經論、その數多し。彼此の爭理、その疑いまだ解けず。而もこの最妙の圓宗、なほいまだ闡揚せられず。けだしこの間羣生いまだ圓宗に應ぜざるか。

伏して惟みるに、聖朝久しく如來の付囑をうけて、ふかく純圓の機を結び、一妙の義理、はじめて乃ち興顯し、六宗の學衆、初めて至極をさとる。いふべし、此界の含靈、今よりのち悉く妙圓の船に載つて、早く彼岸に濟ることを得ん。

善議等、幸ひに休運にあひ、乃ち奇詞を閲す。深期にあらざるよりは、なんぞ聖世に託せんや。慶躍の至りに任へず。敢て表を奉つて陳謝し、千載の外、瞻仰絶えず。悽慺の至りに任へず。謹みて以て聞す。」

これによつてみるも、最澄法師の法華經の講筵が、いかに偉大な影響を與へたかがわかる。

「その中に說くところの甚深の妙理、七箇の大寺六宗の學生、昔よりいまだ聞かざるところ、いまだ見ざるところなり。」

といふ文句より類推しても、最澄のすぐれた學識と、ふかい敎養にたいして、今さらの如く驚歎したことがわかると共に、七大寺のゆゆしき學者たちも、その講演によつて、改めて法華經のもつ偉大な哲學と、宗敎とを見直したことが、ハッキリわかるのである。

九、入唐求法

それは延曆二十一年秋九月十二日であつた。

高雄山寺の講演をすまして、比叡山へもどつた最澄法師のもとへ、朝廷から突如、

補　入唐請益天台法華宗還學生

といふ辭令が屆いた。かねての願ひであつた、入唐求法の勅許が下つたのである。最澄の歡びはいふまでもない。陰に陽に、このことについて斡旋した和氣弘世を始め、朝廷の要人たちも、みなわが事のやうに喜んだ。何のために最澄は、遠く海を渡つて支那に法を求めようとしたが。それは朝廷へ上奏した『入唐請益を請ふ表』が、明らかにそれを物語つてゐる。

『沙門最澄言す。最澄早く玄門に預り、幸ひに昌運に遇ひ、聞を至道に希ひ、心を法筵に遊ばしむ。つねに恨むらくは、法華の深旨、なほいまだ詳釋あらざることを。幸ひに天台の妙記を求め得て、披閲すること數年、字謬り行脫して、未だ細趣を顯はさず。若し師傳を受けざれば、得たりと雖も信じられず。誠に願くば、留學生、還學生各一人を差して、この圓宗を學ばしむれば、師資相續いで、傳燈絶ゆることなからん。

此國現に三論と法相とを傳ふ。二家は論を以て宗となす。經宗となさざるなり。

天台ひとり論宗を斥け、特に經宗を立つ。論は經の末、經は論の本なり。本を捨て末に隨ふは、猶ほ上に背き下に向ふがごとし。經を捨て論に隨ふは、根を捨て葉を取るが如し。

伏して願くは、わが聖皇の御代に、圓宗の妙義を唐朝に學ばしめ、法華の寶車をこの間に學ばしめまたはんことを。然れば則ち、聖上法施の基、さらに往日を厚くし、釋氏法財の用も、また永代に富まん。望むところの法華圓宗、日月と明をひとしくし、天台の妙記、まさに乾坤と固きを等しうせん。』

これによつてもわかるやうに、最澄が遠く海外に法を求めた原因は、まさしく天台法華宗を、わが國に弘めんがためであつた。しかもそれはあくまで鎮護國家のためであり、濟世利民のためであつた。つまり『諸佛出世の本懷、衆生成佛の直道』たる『法華經』をもつて、玉體の安穩と天下の泰平とを、祈るためであつた。だが、久しく法華の研鑽に沒頭したとはいへば、

『字あやまり、行だつして、いまだ細き趣きを顯はさず。もし師傳をうけざれば、得たりと雖も信ぜず。』

で、なんとなく法華經の見方について、內心いささか不安な點があつた。それでこの上は、遠く支那に渡つて、親しく天台の名師より教へをうけたい。いや、受けねば安心ができない。といふ極めて眞摯な學的良心と、宗教的情熱が、たう〳〵入唐求法となつてあらはれたのである。

一方、また畏くも天皇におかせられても、かつてその昔、聖德太子が法華經の精神を以て、政治の指導原理とせられたやうに、この經を所依とする天台の法門によつて、清新なる平安朝文化をうち建てんとの思召によつて、わざ〳〵かねて御信任渥き最澄

をして、唐に法を求めしめられたのである。それは入唐勅許の詔が、明らかに證明してゐる。

『それ鬐中の明珠は、勇なくんば賜ふことなく、妙高の衆寶は、信なくんば取ることなし。ここを以て、南岳の高跡天台の遺旨は、薄德寡福にしてあに敢て得んや。

いま最澄闇梨、久しく東山に居りて、宿緣相追ふて、この典を披覽し、すでに妙旨を探る。久修業の所得にあらざるよりは、誰が敢てこの心を體せんや。』

かくて最澄は、光榮ある還學生として、入唐留學を命ぜられたのであるが、こゝでちよつと一言しておかねばならぬことは、『還學生』と『留學生』の區別である。還學生といふのは、見學、視察が目的で、いはば海外視察員である。したがつて長期の滯在はゆるされないのである。現に最澄も自ら上表文のうちに『往還限あり』といつてゐる。之にたいして留學生は、文字通り『留つて學ぶ』のが目的であるから、期限はないわけである。最澄はこの還學生として、入唐の勅許をたまふたのである。

有難き御思召を拜した最澄は、謹んで謝表を上り、ついで十月二十日、さらに上表して、おのれが漢語に通ぜざるため、譯語(通譯)として弟子の義眞を、さらに從者として丹福成を伴はんことを請ふたのであつた。もちろんその願は直にゆるされた。かくて延曆二十二年四月十六日、日本還學生沙門最澄阿闍梨も遣唐使藤原葛野麿一行と共に、攝津難波(大阪)の港を發つたのであつた。

これよりさき、皇太子安殿親王は、最澄の入唐求法を聞こしめされ、能書のきこえ高きものをして、『法華』『無量義』『普賢』の法華三部經二部を書寫せしめられ、その一部は唐の天台山へ、他の一部は比叡山に納めしめられたが、剩へ入唐の費用にとて、金銀數百兩を御喜捨遊ばされたのである。

話はもとへ戻る。四月十六日、華々しく難波の港を解纜した、遣唐使一行の船は、間もなく暴風雨にあひ、たちまちにして難破船まで出した。そこで、遣唐使らは、一旦難波津に歸航し、直ちに京都に還り參内してその旨を闕下に伏奏して、再出發の日を待機することになつた。一方、最澄の乘つてゐた船は、幸ひにもその難をまぬがれ、風波を凌いで、無事に九州へついたが、そんなわけでやむを得ずかれは

太宰府の竈門山寺に滯在してしばらく渡海の日を待たねばならなかつた。

だが、渡海の日はつひに來た、あくる二十三年五月、再び難波の港を船出した遣唐使の一行は、瀬戸内海の航路も恙なく九州についた。そこで同年七月六日、かねて太宰府で待機中の最澄は、この一行と共に、めでたく肥前の國田浦の港に纜を解いて、いよ〳〵入唐求法の壯途にのぼつたのであつた。この時、奇しくも空海のちの弘法の大師は、留學生として唐に渡つたのであるが、當時空海は、三十一歳、いまだ名もなき勤操門下の一青年僧であつたが、最澄は七歳の年長、三十八の壯年、しかも通譯や從者をも伴ふた還學生である。その社會的地位には、文字通り雲泥の相違があつた。

ところがである。出發の翌日、又もや大暴風にあひ、忽ちにして四船おの〳〵分散し、第三、第四の船は行衛しれずになつてしまつた。

しかし幸ひにも第二の最澄の乘つてゐた遣唐副使の船は、海上に漂ふこと五十四日、九月一日やうやく明州(寧波)につくことができた。一方、空海及び遣唐大使の乘つてゐた第一船は、八月十日、第一船より早きこと二十日、海上いくたの危險にあひながらも、無事に福州についたのであつた。もしもこの時、かりに二人が、第三、第四の船に乘つてゐたとしたらどうであつたであらう。おそらく平安朝の巨星、傳敎、弘法の兩師は出なかつたであらうし、あの輝かしい平安文化の華は咲かなかつたであらうとおもはれる。げに因緣は不思議である。

漸く死線を越えて、明州にその上陸第一歩を印したが、最澄は長途の旅、しかも波浪と戰ふこと、五十四日、そのためつひに最澄は病に罹り、やむを得ず一と袂をわかち、ここで專ら靜養につとめることになつた。

幸ひ半月にして病も癒えたので、義眞、丹福成を伴ふて、明州を發つて台州に向ふたのであつた。

一〇、名師を尋ねて

萬里の波濤を越えて、はる〳〵支那に法を求めた最澄が、最初に訪れた名師は、天台山修禪寺の座主道邃和尚であつた。そのころ道邃は、たま〳〵刺史陸淳の請によつて、台州(今の臨海縣)に來つて、龍興寺に天台の法門を講じてゐた。幸ひに陸淳の紹介によつて、道邃にあふて親しくその敎をうけることができた。道邃は、支那天台宗の第六祖にあたる荆

溪大師について、ふかく天台の學を修めた人で、『止觀和尚』と稱せられ、當時、行滿とともに、支那天台の二大双璧と仰がれてゐた。その知名の人にあふて、したしく教へをうけることができたことは、最澄にとつては なとしても仕合せなことであつた。

しかもこゝで、わづか十日間ではあつたが、『摩訶止觀』の講義をきいたのであるから最澄にとつては、何ものにもかへがたい、法悦であつたとおもはれる。

道邃のもとを辭した最澄は、再び旅裝をととのへて、かねて憬れの天台山へ向つた。台州から天台山までは、行程およそ十里あまりある。十月七日、一行三人は無事に、佛隴の莊につくことができた。

いつたい佛隴とは、天台山の西南隅の一峰で、そのむかし天台大師が、始めてさとりを得たといふ、きはめて由緒のあるところである。坐主の行滿は、喜んで彼を迎へた。そして心から、遠く海をわたつて、はるゞ法を求めに來た、最澄のふかき求道の志を賞讃し、

『わが滅後、二百餘歳にして、はじめて東國において、わが法興隆すべし。』

といふ天台大師の豫言が適中したといつて、みづから傳へてゐたところの、大切な天台の法具や書物を、惜し氣もなく最澄にあたへたのである。

かくて佛隴の莊に留ること五日、最澄は行滿和尚の案内によつて、やうやくかねて憧憬の的であつた天台山にのぼり、親しく天台大師の廟前にぬかづくことができた。いつたい天台山は、現今の浙江省台州府天台縣にある海拔四千呎の高山で、古來、台嶽、南嶽といはれ、かの五台山と共に、支那における二大靈山と稱せられ、隋の太建七年、天台大師が佛隴の峯に修禪寺を建て、天台宗の根本道場としてから、法燈綿々としてたゆることなく、その盛時は山中にはいくたの堂塔、僧坊櫛比してゐたといはれてゐる。

おもへば十九のときから、三十八のけふまで、夢寐にも忘れたことのない、天台大師の面影、いまやみづからその廟前に跪いてゐる、おのれの姿を見出したとき、かれの悦びはどんなに深いものであつたであらう。表向きは、天台の書物を、日本に請來するための旅ではあつたが、心の奥底には、祖廟へ參拜したいといふ、つよい念願が、たへず動いてゐた。しかも、その望みは、つひに叶へられたのである。さだめし最澄は、萬感胸にせまる思で、恭しく廟前にぬかづき、ねんごろに香華を手向け、經を誦し、誓つて天台の法門を東國に弘めんと、かたく決心したことであらうとおもふ。

ついで一行は、行滿坐主に伴はれて、さらに修禪寺（佛隴道場）に詣ふて、安殿親王より御寄進の法華三部經を献げたのであつたが、こゝで、かれは、行滿和尚から、つぶさに天台宗の奥義を授かつたのであつた。行滿が、どんなに最澄の法器を敬愛したかは、次の言葉によつてもわかる。

『日本國求法供奉大德最澄法師に逢ふ。云く親しく聖澤を辭し、まのあたり春宮にうけて、妙法を天台に求め、一心を銀地（天台山）に學ばんとして、勞苦を憚からず、遠く滄波をわたり、夕を忽がせにして朝にきき、身を亡して法のためにすと。

この盛事をみるに、また何ぞ半偈を雪山にもとめ、道場を知識に訪ふに異ならんや。まさに行滿傾くるに法財をもつてし、捨するに法寶を以てす。』

行滿から天台の法門をうけた最澄は、さらに禪林寺において脩然から禪を受け、また國清寺の惟象から密教をつたへられた。

かくて天台山に滯在すること、およそ一ケ月、十一月五日、再び行滿に伴はれて山を下り、台州龍興寺に戻つて、道邃の教へをうけたのであつた。龍興寺におけるかれの逗留は、ずいぶん長かつた。十一月から翌年の春二月まで、もつぱら道邃について教へをうけた。したがつて道邃の最澄にあたへた影響は著しかつた。かれが歸期後、不惜身命の態度で、比叡山上に、大乘の戒壇を設立せんとした、その動機も、まさしくこのときに始まつたといつていいとおもふ。『神皇正統記』には、こんな挿話がしるされてゐる。

『天台山にのぼりて、智者大師六代の正統、道邃和尚に謁して、その宗をならはれしに、かの山に智者大師歸寂よりこのかた、鑰を失ひて開かざる一つの藏ありき。試みにこの鑰にてあけらるるに、とどこほらず。一山こぞりて渴仰しけりとぞ。』

けだし、この意味は、おそらく最澄が、ふかく天台の教理を體得してゐたことを、象徴したものであらうとおもはれる。

學ぶべきものを學び、つたへらるべきものを傳へた最澄は、久しく留つてゐる時日もないので、名ごり惜しくも、師匠を仰く道邃と別れをつげ、台州を發つて、その歳の三月二十五日、明州（寧波）へ戻つた。そしてここで遣唐使一行の歸朝を待ち合はしたのであつた。ところが、歸朝の船が、明州を解纜するには、なほ一月あまりの準備がいるといふので、最澄は、この期間を利用して、さらに越州（紹興）

龍興寺の順曉阿闍梨を訪れて、密教をつたへたいとおもひ、明州をたつて越州を向ふた。幸ひに龍興寺において、かれは天台山において得られなかつた金剛界五部の灌頂と、胎藏界三部三昧耶の灌頂を授かることができたのであつた。

順曉から密教の相承をうけたのち、最澄はさらに太素、江祕、靈光の三人から、それ〳〵雜部の密教の相傳をうけ、そして越州を發つて、明州に歸つたのであつた。

幸ひに船の準備もすでに出來上つてゐたので、貞元二十一年五月十八日、最澄は遣唐使一行と共に、明州を解纜して、いよ〳〵歸朝の途についたのであつた。

一一、新佛教の樹立

在唐八ケ月、唐の貞元二十一年五月十九日、明州（寧波）を發つた最澄一行は、一路平安、六月五日恙く對馬の阿禮の港についた。往路は五十四日を費したが、歸路はわづか十八日であつた。六月下旬に入京、翌月四日に參内して、したしく闕下に復命し、みづからかの地より請來した經典・論疏二百三十部、四百六十卷及び佛具等を献上したのであつた。そのとき上表文（進官錄）には、次のことばがしるされてあつた。

『伏して惟れば、陛下靈をあつめて震より出で、運を撫して、極に登りたまふ。北蕃來朝して、賀正を毎年に請ひ、東夷北首して、歸德を先年に知

れり。ここに於て、想を圓宗に屬して、はるかに一乘をおもひ、妙法を紹宣して、もつて大訓となす。これによつて、妙圓の極敎、機に應じて興顯し、灌頂の祕法、皇緣を感じて圓滿す。寂澄、使を奉じて法をもとめ、遠く靈蹤をたづね、往つて台嶺にのぼり、みづから敎迹を寫す。獲るところの經並に疏、及び記等、すべて二百三十部、四百六十卷なり。謹んで弟子經藏をして奉進せしむ。ただ聖鑒をもつて、二門の圓滿を照明したまへ。誠懇の至りに堪へず。表を奉じて戰慄す。謹んで申す。』

澄寂が請來せる二百三十部の經論、書籍のうちには、かづ〳〵の珍らしい本があつた。これまでわが國につたはつてゐない書物も、可成り多くあつた。いづれもそれは唐土において、彼がみづから寢食を忘れて書寫したり、種々と苦心して蒐集したものである。

なほこの時、寂澄は支那より茶の種を將來したといはれてゐるが、現に比叡山の麓にある坂本の日吉の茶園は、その名殘だとつたへてゐる。

かねてふかく寂澄法師に御歸依遊ばされてゐる桓武天皇の御滿足は、改めていふまでもない。天皇は、さつそく和氣弘世に勅して、寂澄の將來せる天台の法門を、天下に流布して、僧俗に學ばしめんと思召めされて、宮中にある上紙を、圖書寮に下賜せられ、七部を書寫とせしめ、それを南都七大寺に賜はつたのであつた。そしてさらに京都衣笠山の麓、天台院において、南都の學僧六名を召して、寂澄の將來した經疏によつて、新しく天台の法門を研鑽せしめられたのであつた。

ついで天皇は、さらに弘世に勅を下したまひ、

『眞言の祕敎、いまだこの土に傳はらず。しかるに澄寂阿闍梨、幸ひにこの道を得、まことに國師たり。よろしく諸寺の智行兼備の者をぬきて、灌頂三昧耶を受けしむべし。』

と仰せ出されたのであつた。

こゝにおいて、弘世はつつしんで勅を奉じ、九月一日を卜して、かねて因緣のふかい高雄山において、寂澄を阿闍梨として、わが國における最初の灌頂をとり行ふたのであつた。受者は七大寺の高僧八名であつた。ちろんも

これらの費用はすべて朝廷より下賜せられた。當時、天皇が弘世に賜ふた口宣のうちに、次のやうなお言葉があつた。

『法會の費用は、多少を論ぜず、闍梨（寂澄のこと）の言に隨つて、皆悉く奉送せよ。ただ、國內に本より無きものを除くのみ。』

かうした優詔を拜した寂澄阿闍梨の悅びは、はたしてどんなであらう。

この高雄の灌頂が終つて間もなく、天皇は再び弘世に勅して、洛西に地を擇び、灌頂壇をしつらへ、ここでまた灌頂を行はしめられた。

それは、專ら玉體の安穩をいのるための灌頂であつた。

かやうにして、朝廷の寂澄を遇さること、きはめて厚かつたが、いまだ天台宗は、制度上一宗として公認されてはゐなかつた。そこで寂澄は、延曆二十五年正月三日、左の如き表文を奉つて、南都の六宗の

外に、新た天台法華宗のために、年分度者二人をおかれんことを、請願したのであつた。

『沙門最澄言す。最澄聞く。一目の羅は、鳥を得ること能はず。一兩の宗、なんぞ普く汲むに足らんや。いたずらに諸宗の名のみあつて、忽ちに傳業の人を絶てり。まことに願くは、十二の律呂に準じて、年分度者の數をさだめ、六波羅蜜にのつとりて、授業の諸宗の員を分けしめ、兩曜の明に則つて、宗別に二人を度したまへ。

華嚴宗に二人、天台法華宗に二人、律宗に二人三論宗に三人、小乘成實宗を加ふ。法相宗に三人小乘俱舍宗を加ふ。

然ればすなはち、陛下法施の德は、ひとり古今に秀で、群生法財の用は、永く塵劫に足りなん。

區々の至りに堪へず。謹んで表を奉り、以て聞す。』

これが最澄阿闍梨の上表文である。

ところで、こゝでちよつと讀者のために一應、註釋を施しておかねばならぬことは、この『年分度者』といふことである。

いつたい『年分度者』とは、年分學生、年料度者ともいひ、年々に一定の數を定め、分に與りて得度するといふ意味で、昔は、とくに平安朝では、私に出家することを許されず、朝廷より嚴重に、一定の數をかぎつて、得度せしめられたのである。すなはち延曆十二年四月には、

『制す。自今以後、年分度者は、漢音を習ふにあらざれば、得度せしむること勿れ。』

といふ布告が出されてゐる位で、最初は三十五歳以上で、所定の學科を修めて、試驗に及第しない者には、得度はゆるされなかつたのである。

尤もその後、年齡は二十歳以上と改められ、學科試驗の方も、よほど緩和されたが、とにかく得度するには、嚴重な制度があつたわけである。こゝでちよつと申し添えておきたいことは、その『得度』といふ術語である。今日では『得度する』といへば、剃髮染衣すなはち『僧侶になる』といふことと、いつしよに考へられてゐるが、本來は得度といへば、生死の海を渡つて、涅槃の岸に到ることである。

すなはち『度』とは、梵語の『波羅蜜多』Paramita で、『到彼岸』『彼岸に到る』といふ意味を、略して『度』といつたのである。したがつて『度』とは『渡る』といふことである。迷の此岸より、悟の彼岸へ渡る。それが『度』である。剃髮して出家することを『得度』といふのは、つまり出家することは、彼岸に渡る、最初の段階であるから、さういふのである。

とにかく今日、官吏には官吏、醫者には醫者、辯護士には辯護士、それ〴〵一定の國家の試驗が行はれてゐるやうに、むかしは僧侶になるにも、嚴重な國家的なむづかしい試驗が科せられてゐたのである。そんなわけで、平安朝の始め頃には、よほどの人物でなければ、たやすく僧侶にはなれなかつたのである。ところで最澄の上表文をよまれた讀者は、すでに御承知のやうに、奈良の六宗の外に、天台宗の一宗を公認せられ、そして新に二人の年分度者を賜ひたいと、いふ請願の趣旨である。尤も六宗といつても、年分度者を賜つてゐるのは、三論と法相の二宗であつた。しかも、各々五人づつ勅許されてゐるに

も拘らず、その他の宗旨は、どういふ事情があつたか知らぬが、年分度者はゆるされてゐなかつた。したがつて最澄は、得度令の全面的な改正を請願すると共に、新に天台宗にも、二人の年分度者を願ひ出たわけであつた。

幸ひにしてその請願は、正月二十六日付で、直ちに、許可された。そして天台宗の二人のうち、一人は大日經(大毘盧遮那經)を、一人は『摩訶止觀』を讀ましめるといふことになり、こゝに天台宗は、制度上、はつきりと一宗として公認されたわけである。しかもその上、最澄の請願どほり、從來の得度令も改正され、『三論』と『法相』とは、二人づつ減ぜられて、おの〳〵三人となり、その代り『華嚴』と『律』とは、新にそれ〴〵二人の得度がゆるされることに、なつたのである。

右にのべた年分度者のことや、天台宗の公認に關すが問題は、佛教に直接關係をもたぬ、多くの若い讀者にとつては、あまり興味のないことかも知れないが、最澄の偉大なる人格を知る上には、きはめて重大なる問題であるのである。といふのは　天皇がいかに最澄の高潔なすぐれた人格を御信任あそばされてゐたか。亦かれが國家のために、弘めんとする天台の法門に對して、どんなに深い御理解をもつてゐられたかといふことが、これによつてもはつきりわかるのである。いや、むしろ平安朝の新しい文化の基礎としての宗教を、天皇は、どんなに重く見てゐられたかといふことが、此問題でわかるのである。何といつても國民生活の刷新には、政治と宗教とが、いちばん大切である。畏くも　桓武天皇が「匂ふが如くいまさかりなり」とうたはれた。奈良の都を捨てて山城の地に奠都されたのも、歸するところは腐敗した政治、墮落した宗教を更新して、信と力にちみた、新しい力づよい日本を建設したまふがためであつた、幸ひにして政治上の改新は成つたが國民の精神を、眞に安定せしめる宗教は、舊態依然として、來だ建設の緒にはついてゐなかつた。尤も遷都と同時に、朱雀大路の東西に東寺と西寺とをいち早くも御建立あそばされたが、しかし大きい立派な寺はできてもほんたうの僧侶、清新潑剌たる眞理の法をつたへる人物が出なかつたのである、ところが、　天皇は幸ひ比叡山上に一乘止觀の法燈を高くかかげて專心に鎮護國家のために法を修する最澄阿闍梨を見出されたのである。天皇の御滿足がいかに深いものであつたかは、以上のべた所によつても、ほぼわかるのであるが、それにもまして歡喜にたへなかつたのは最澄であつた。奈良のゆゆしい學匠たちが、おのれ一身の解脱か、さなくばわが身の榮達を望んで、ひたすら學問修行したにたいし、最澄はどこまでも法のために、眞理のために、いや、國家をして眞に正法の國たらしめんがために、專心に天台の法門を學び、行じ、弘めんとしたのである。隨つてかれが天皇の御親任を蒙つて悅んだといふことは奈良の僧侶たちが、權勢に阿附して、おのれ一身の榮達を願ふといふやうなさういふさもしい意味のものでは、全然なかつた。あくまで國家の前途を憂ふるかれにとつては、聖恩の渥きをおもふにつけても、天台の法門をわが國につたへ、かつ弘めることが、民の心を本當に安んずることであり、しかもそれがそのまま、僧門の身して、天皇の政治を翼賛したてまつる臣民の道だと感じられたのであつた。

叡澄は、そんな意味で、粉骨碎身の誠をつくして、ひたすら天皇のために、國家のために一乘の敎をわが日本に弘めんとしたのである。幸ひにして　天皇の殊遇をうけて、着々とその念願は叶べられていつたのであるが、好事魔多しの世の喩にもれず、叡澄にとつて、いや日本にとつて、最も悲しむべき事件が出來したのであつた。それは畏くも　桓武天皇の崩御である。延曆二十五年三月十七日、この日　天皇は寶算七十を以て、つひにお崩れあそばされたのである。

一二、逆境の修錬

どんな人にも、順境と逆境とがある。一生涯のうちには、たれにも順境と逆境とがあるものである。また順境のときには、ゴウ・アンド・ゴウ（進め！進め！）でゆく。だが、一旦、逆境によると、ストップ・アンド・ストップ（止れ！　止れ）がつづくところで多くの人は順境のときにはすつかり自分の立場を忘れてすぐに威張りたがるものである。だが順境に威張る人は、必ず逆境にくさるのである。

『威張るな。くさるな』これが人生に處する心構へつまり處世訓である。にも拘らず、多くの人は、その逆を行くのである。所詮、交通整理のあの信號機のやうに、ゴウ（進め）の次はストップ（止め）ストップの次はゴウが出る。それをゴウの時にはゴウだけを、ストップの時には、またストップだけしか思はない。だから自然、いたづらに威張つたりむやみにくさつたりするのである。

憂きふしと暫し待ちみよ竹の子の
　生ひ添ふのちの影もことあれ

と、古人が筍の節にことよせてうたつた、この和歌は、たしかに考へさせられる點がある。

世界戯曲史上、三大作家の一人だといはれてゐるイブセンは、

「藝術上の作品には、うまれつきいろ〳〵の情熱や苦痛が必要である。なぜなら、情熱と苦痛は、生活を充實し、生活に意味を與へるからだ。情熱や苦痛が存在しないと、作家は創作することが出來ない。ただ書物をかいてゐるばかりである。」

といふやうなことをいつてゐるが、たしかにそれはほんたうだとおもふ。

だが、それはひとり文藝上の作品ばかりではない。逆境はまたよく『人』をつくるのである。「艱難汝を玉にする」といふ諺のやうに、逆境にあふてこそ、はじめて人間が鍛へられてゆくのである。『逆境の修練』それが大切である。

「世上の風霜は、錬心の境。世情の冷煖は、忍性の地、世事の顚倒は、修行の資なり。」

と、勝海舟は喝破してゐるが、まつたくそのとほりだとおもふ。しかしと、かく凡人は、順境と逆境とを、さながら平行の二線と考へて、順のうちに逆あり、逆のなかに順のあることを知らない。しかし、偉人はつねに順逆を不二とうけとる。順の中に逆あることをさとり、逆のうちに順のあることを知る。したがつてそこに自づと『轉逆爲順』の術がうまれるのである。

なぜ、突然こんな話を、わざ〳〵ここに持ち出して來たか。賢明な讀者はすでに御存じであらうとおもふが、桓武天皇の崩御、ついで和氣弘世の逝去、その他、新佛敎の確立について、ふかい認識と理解・

とをもつてゐた人たちが、つぎ〳〵に、あるひは世を去り、あるひは野に下つて、權勢から遠のいていつたことは、たしかに最澄にとつては、一大打擊であつた。延曆の御代が、大同となり、さらに弘仁にかはると朝廷の新佛敎にたいする認識も、また自然に變つて來た。もちろん　平城天皇にしても　嵯峨天皇にしても、御父君　桓武帝の御遺志をつがせられて、何かと朝廷の新佛敎の樹立にたいしては、御支援を賜つてゐるが、朝廷の要人がかはると、しぜん先帝御在世のときのやうに、萬事都合よくゆかなくなつた。それに弘法大師の眞言宗の勃興と、奈良の舊佛敎の擡頭は、又おのづから最澄の地位を變化せしめずにはおかなかつた。

四十歲を一轉機として、いよ〳〵かれの苦難の生涯は始まつたのである。

しかし、順境のときにも、あくまで謙虛で、けつしてひとに威張るやうなことのなかつた最澄は、逆境にあふても斷じてくさるやうな人ではなかつた。

『天のこの人に、大任を授けんとするや、まづその心を苦しめ、その筋骨を勞せしむ。』

と孟子も誡めてゐるやうに、最澄は、惠まれざるを、かへつて惠とうけとつた。惠まれないものこそ、本當にめぐまれてゐるのだ。と考へた彼は、それをきつかけに、退いてひたすら自己の錬成と、新佛敎の確立に向つて精進をつづけていつた。

では、いつたい最澄は、どういふ風にして、その逆境に處していつたか。どういふ態度で、逆境の修練がなされたか。それをしたしく、その生活の事實に照らして、眺めてゆきたいとおもふ。

すでにのべたとほり、逆境の第一步は、桓武帝の崩御のそのときから始まつた。ときに最澄に四十歲の働きさかりであつた。爾來、四十九までの九年間は、文字通り沈默の修練期であつたといつていい。せつかく天皇の叡願によつて、新佛敎は確立され、天台宗は公認されたといつても、それは、いはば骨組が出來たといふばかりで、その內部の雜作は、まだ出來てゐなかつた。得度令の改正にかつて、新に年分度者二人を賜つたとはいへ、それは名ばかりでいろ〳〵な事情で其實施がのび〳〵になつてゐた。現に其證據には、大同五年正月になつて、始めて、やつと八人の得度がゆされたといふ始末であるが、それも大同二年以來、四年間の年分度者の數であつた、而もこれ　天台宗に　おける最初　のもので、其八人のうち　一生涯叡山に在住して、師匠と苦樂を共にしたのは光定　ただ一人で、他の者はすつかり師匠を見限つて、それ〴〵叡山から去つてしまつてゐるのである。ひと頃は、在山の者多もく、南都佛敎にたいして、大勢力であつた叡山も、一人へり、二人減りしてだん〳〵その數を減じ、しまひにはわづか十名そこ〳〵の小人數になつてしまつたのである。それも沙彌（一人前の僧侶でないもの）を加へてのことである。名にし負ふ鎭護國家の道場も、今ではすつかり荒廢して、まるで淋しい山寺のやうになつてしまつたわけである。それに一面、日頃あまり頑健でなかつた最澄も、弘仁三年の夏には、とう〳〵病のために倒れてしまつたのである。當時はよほど重體だつたとみえて、わざ〳〵弟子たちに遺言までしてゐる位である。で、もしもこのときかれの病が癒えなかつたとしたならば、おそらく今日の比叡山も、また天台宗もなかつたであらう、とおもは

れるが、とにかく最澄にとつては、まさしく内憂外患交々いたるといふ有様である。

かうした逆境に處して、かれはどういふ態度をとつたか。そこは流石に最澄であつた。恵まれざる境遇を、めぐまれた試練の恩寵をうけとつて、いささかも初志を翻へさず、ひたすら國家のおんために、おのれの研究と修練に精進した。そして着々と立教開宗の基礎工作を、つづけていつたのであつた。

けだしかの『三部長講會』は、その一つの證左である。いつたいこの『三部長講會』とは、いふまでもなく三部の經典、すなはち『法華』『仁王』『金光明』の護國の經典を、長期に亙つて、讀誦し、讃仰する法會であるが、かれは『學』と『信』と『行』との上から、眞に力づよい日本の成長のために、一向に新宗教の興隆をはかつたものであつた。

『敬つて三寶の御前に向す。

わがこの日本國に、桓武聖皇帝、無緣の慈悲をおこして、法華宗を建立し、法華經疏、玄疏、止觀等、數百卷の教迹をうつして、永く七大寺に納めしめたまふ。つねに唯一の車をめぐらして、おなじく五種の性を會し、ともに大白牛に駕して、みな悉く寶所にいたらん。

毎年の光明會に、まさに國家を鎭めんと、十二の學生をえらび、六律六呂にととのふ。また比叡の峯において、修學院を建立し、一切經、道具、壇像などを安置し、大寶をもつて、法の衞となし、大夜に法の炬となす。

こゝにおいて、最澄等、一兩の同法をひきゐて、大同四年の春、二月十五日、この長講妙法蓮華經を建立す。天長地久の願、とほく未來際を期し、一日も講を闕かさずして、兩日に一卷を竟んぬ。

つねに一乘の法を護り、日域に敷揚し、十方界に周徧して、五性をしてみな成佛せしめん。』

これは長講法華會の願文であるが、これによつて、だいたい最澄の眞理にたいする情熱と、國家愛に燃ゆる信念のほどがわかるのである。

末つひに海に入るべき山水も
　しばし木の葉の下くぐるなり

およそ大事業の完成を志すものにとつて、最も必要なことは、『永く屈して、大きく伸びる』ことである。その仕事が、その目的が、大きければ大きいほど、この心構へが大切である。最澄こそ、文字通りその言葉を、實地にあらはした人である。天台一乘の法門を、國家のために、天下に流布せん。といふ大きい誓願をもつ彼は、一面また密教にたいして、ふかい憬れをもつてゐた。支那に渡つたとき、短時日であつたとはいへ、したしく密教の阿闍梨について、その傳授をうけ、剩さへ歸朝早々、勅命によつて、高雄山において、みづから灌頂を行ふたが、なんといつても密教についての知識は、まだ不十分であつた。專門的に密教を修めて來た空海には遠く及ばなかつた。空海が彼の地より歸來した密教に關するの多く文獻を見るにつけても、その方面についての學識の足らないことを、しみ〴〵と痛感してゐた最澄は、大同四年八月、その頃、高雄山にゐた空海のもとへ、わざ〳〵弟子の經珍を遣はし、禮を厚くして、眞言の法門に關する書籍十二部、五十五卷のを借用申込んだのである。ついで弘仁二年二月にはさらにみづから辭を低うして、灌頂を授け授けられんことを懇望したのである。

『卑僧の心裏、つねに阿闍梨（空海のこと）の加被をかうむり、秘密宗を學ばんとおもへり。ただ穩便得がたく、久しく歳月をすごしぬ。このたび御院に向ひ、遍照一尊灌頂をうけ、七ヶ日ばかり、佛子等の後に侍し、法門を修學せん。和尚もし無限の慈みをたれたまはば、明日必ず參奉せん。伏して乞ふ指南を垂れたまへ。』

なんといふゆかしい謙虚な態度であらう。もちろん、それは密教にたいする熾烈な求道的な精神が、しからしめたとはいへ、彼の美しい人格が、これによつてもわかるのである。なんといつても、最澄は空海よりも七歳の先輩である。その社會的地位は、相當まだひらきがあつた。その後輩の空海に對して、みづから弟子の禮をとつて、密教の灌頂をうけんとする態度、それはとうてい最澄ならでは、できない藝當である。すでに第二篇『空海』において、くはしくのべたやうに、むろん空海も、この教界の長老にたいしては、快よく自ら請來した經典を貸與したことであつたし、またしたもく高雄山において最澄のために、灌頂を授けたことであつたが、いづれにしても、最澄のこの謙虚な學的良心について、われらは何人もよき手本として學ばねばならぬ。

一三、地方文化の開拓

弘仁五年の秋、とつぜん最澄は、弟子の義眞を伴ふて、比叡山を下つた。そして渡唐のをり船出した、思ひ出の多い難波の港から、瀬戸内海を船で、九州へ旅立つたのである。目的は？　宇佐八幡宮へ參拜して、親しく謝恩の微意を表せんがためであつた。おもひ出せば十年のむかし、入唐渡海の際、神前にひれ伏して、航海の安全をいのつたときには、まだ三十七歳の元氣な年頃であつた。それからいつの間にか、もう十年の月日が流れてゐる。しかもそのすぎ來し十年は、彼の一生においても、實に波瀾曲折に富んだ歳月であつた。短いやうでもあり、また長いやうでもある、きはめて思ひ出の多い十年であつた。

最澄はしづかに神前に跪づいて、無事に入唐求法の目的をはたし得たこと、天皇の叡慮によつて、國家のために、天台一乘の教へ、をしたしくわが日本に樹立できたことを、心から拜謝しながら、いまさらの如く、ふかい感慨にふけつたことであつた。ここで最澄は、みづから千手觀音の像を彫んで安置しさらに『大般若經』二部、千二百卷、『法華經』一千部八十卷を書寫し、八幡大神のために、神宮寺において『法華經』を講じたのであつた。ついで彼はかつて海路の平安を祈つた香春明神にまふで『法華經』を讀誦して、ふかく神恩を奉謝したのであつた。

香春明神の參拜をおはつた最澄は、やがて太宰府の東北にあたる竈門山の麓、有智山寺にまふでた。ここは、かつて入唐のをり、一年あまりも滯在し、藥師佛の像を彫んで、海路の平安をいのつたところで、かれにとつては因緣のふかい寺である。かれが更に當時、『西の都』といはれた太宰府を訪れ、天下の三戒壇として、名高い筑紫の戒壇院、觀世音寺を參拜したことは、改めていふまでもないとおもふ。

かくて九州に滯在すること凡そ一年、かねての念願をはたして、比叡山に歸つたのは、弘仁六年の春三月のはじめであつた。

筑紫の旅から歸つてから五ヶ月の後、かれは和氣氏の請によつて、南都大安寺において、『法華經』を講じたが、それから間もなく、再び東北の旅に出かけたのであつた。瀬戸内海を船でゆくのとはちがつて、こんどの旅は、隨分に困難であつたやうである。おそらく近江より信濃路に入り、木曾川に沿うふて、恵那山脈の北に出で、信濃の國に入るコトスを辿つたと想像されるが、それは今とは異つて、千年の昔では、まつたく命がけの旅であつた。とくに東國へ通ずる、最も大難路は、信濃坂といはれた神坂峠であつた。山坂十里、途中一軒の旅宿とてはなく、旅人の艱難辛苦は、とても筆舌につくし難い難路である。濟世利民を出家の本分と心得へてゐる最澄は、旅人の苦勞を見るに見かねて、そこに廣濟院、廣拯院をつくつた。尤も院とは名のみで、それはささやかな簡易宿泊所である。美濃の側につくられたのが廣濟院、信濃の側にたてられたのが廣拯院と名づけられたが、それはともに廣く衆人をすくふといふ意味である。たふとい氣持。

神坂峠の險を越へて、信濃路に入つた最澄は、途中またさま〳〵な苦難を嘗めて、諏訪湖のほとり出た。そして諏訪の明神に詣ふでて、天台一乘の興隆をいのつたことはいふまでもない。

信濃路をへて、更に上野の國へ。その行路もまたずゐぶん難儀であつた。飲まず食はずの日が、いく日も〳〵もつづいた。いくたの苦難と闘つて、やうやくその秋の頃、最澄は、上野國綠野郡淨土院に辿りついたのであつた。この淨土院こそ、その昔聖德太子の發願によつてできた寺で、綠野寺とも稱れてゐた。聖武天皇の御代、諸國に國分寺が建てられたとき、有名な高僧道忠は、この寺に戒壇を設けて、東國に法を弘めたといはれてゐる、まことに由緒のある古刹である。ここで最澄は、暫く滯在して、毎日護國の三部經典を講義し、地方の道德を教化したのであつた。

ついで最澄は上野國を去つて下野國へ向つた。そして小野の大慈院に留つて、こゝでもおなじく、日日、三部經典を講讃し、ひたすら一乘の教法を說いたのであつた。小野の地は、現今の栃木縣佐野の北方二里あまり、こゝから、天下の三戒壇の一である、藥師寺までは、凡そ五里、最澄はこゝに詣ふでて、したしく戒壇の模樣を調査し、華やかでもあつたが、またきはめて短い生活であつた道鏡の迹を弔ふたのであつた。

上野、下野を中心とする東國の教化は、わづか六ケ月の短い時日ではあつたが、その足跡はかなり多きいものがあつた。かれは、かづ〳〵の法益を施して、その翌年、すなはち弘仁七年の二月、故なく叡山に歸つたのであつた。

さて、こゝでちよつと申添へておかねばならぬことがある。それは何がために最澄が、叡山を下つて、わざ〳〵九州へ、さらに東國への行脚の旅に出たかいふことである。このことについては、すでに一應その理由をのべておいたが、實をいふと、その目的の一つは、外にあつた。それは、多寶塔の建立であつた。

そのころ地方文化の中樞は、九州の北部と、上野、下野の地であつた。最澄は、この二大中心地に、多寶塔を建てて、新佛教によつて、宗教的に新らしく地方の文化を開拓せんとしたのであつた。もつと

くはしくいへば、寶塔をたてることは、そのまま天台宗の中心道場をつくることであつて、ここへ、叡山で親しくみづから養成した學生を派遣し、一方、彼らをして鎭護國家の祈願を行はしめると共に、また法華經による信仰を鼓吹して、地方の民衆をして、安居樂業せしめんとしたのであつた。

かういふ意圖のものに、最澄は九州、東國の一部を遍歷し、適當な土地を選んで、そこに寶塔を建てやうとしたのであつた。すなはち九州では、豐前の宇佐八幡宮と筑前の有智山寺の二ヶ所、東國では上野の淨土院と、下野の大慈寺の二ヶ所、それに叡山の東塔（近江國）と西塔（山城國）つまりこの六ヶ所に寶塔を建てたのである。尤も最澄の生前中に完成しなかつたものもあるが、いづれにしても、以上にのべたやうな理想の下に、六所の寶塔は、たてられたのであつた。けだし最澄によつて認められた『六所寶塔願文』は、最もよくその建立の趣旨をあらはしてゐるといつてもいい。

『佛法を住持して、國家を鎭護せん。
仰ぎ願くは、一切の諸佛、般若菩薩、金剛天等、心を同じうして、大日本國を、覆護し、陰陽節に應じ風雨時に順じ、五穀成就し、萬姓安樂にして、佛法を紹隆し、有情を利益し、未來際をつくして、つねに佛事をなさんことを。』

辻善之助博士は、『國史に於ける傳敎大師の地位』の中に、この『願文』を引いて、『自分の調査したところによると、わ國を「大日本」とよんだのは、最澄が最初である』といつてゐるが、友人鹽入亮忠君は、その著『傳敎大師』に、この『願文』のつくられた以前、すなはち弘仁四年六月の撰にかかる『長講仁王經會式』に、始めて『大日本國』の名稱が用ゐられてゐると指摘してゐる。いづれにしてもわが國において、『日本』に『大』の字を冠して、はじめて『大日本國』といつたその人は、誰あらう、わが傳敎大師最澄であることを、われらはハッキリと記憶せねばならぬと同時に、八紘一宇を旗印として、大東亞共榮圏の確立に邁進するわれ〳〵は、最澄によつて提示された、この偉大なる國民的自覺を、新しい角度から見直す必要があると思ふ。

一四、批判と享受

―天台學の立場―

いつたい佛敎には二つの面がある。一つは哲學、一つは宗敎である。哲學は批判が本領であり、宗敎は享受が生命である。專門的なことばでいへば、拆伏と攝受である。破邪と顯正である。いづれにしても、このちがつた面を佛敎は、本來の性格としてそなへてゐるのである。しかし、違つた面といつても、それは一應、論理的な立場からいつたまでで、實はちがつたままで、この二つの面は、佛敎といふ全體のうちに、止揚され、辨證されてゐるのである。いひかへれば、ちやうど子供にたいする親の愛情が、ある時は、嚴父の愛となつて現はれ、ある場合には、慈母の愛となつてあらはれるのと同じである。いふまでもなく嚴父の愛は、「叱り手」の愛であり、慈母の愛は、「抱き手」の愛である。一方は哲學的な批判であり、一方は宗敎的な享受である。一は智慧の世界

であり、一は慈悲の世界である。一見、それはいかにも矛盾してゐるやうにも受けとれるが、子供にたいする可愛さには、何のかはりもない。『親心』において、この「叱り手」と「抱き手」とは、しよせん一つである。ただその表現を異にしてゐるだけのことである。

「嚴父は、嚴しいなかに慈みをもて、慈母は、慈みのうちに嚴さをもて。」

と古人はいまもめてゐるが、たしかにそれは本當だとおもはれる。だが、ともすると、子供はこの親心にたいして、正しい認識をもたぬ場合が多い。嚴しい『叱り手』の一面だけをみて、むやみに親心を批判したり、またやさしい「抱き手」だけを眺めて、親心を甘くみたりするのである。もとよりそれはいづれも認識不足である。佛教を眺める場合でも、まったおんなじである。哲學の面だけをみて、佛教を裁いたり、宗教の面だけしか考へないで、とやかく佛教を批評することは、なんといつても片手落ちの議論だといはざるを得ない。

さて、話はまたつい横道へ外れたが、最澄には、古來のすぐれた高僧のやうに、ちよつとみると、いかにも矛盾してゐるやうな二つの性格があつた。それは鋭い批判の面と、暖かい享受の面である。彼は、つねに春風もつて人に接するといふ、きはめて温容玉の如き性格のもち主であつたが、しかし、その一面また秋霜もつて人を裁くといふ、きはめて嚴肅なつよい性格の所有者でもあつた。だが、實をいふとこの二つの異つた性格が、彼をして偉大な哲學者たらしめ、また、すぐれた宗教家たらしめたのであつた。

ところで、かれの五十六年の生涯からいふと、四十九歳までは、嚴密にいへば弘仁六年八月の『大安寺の論諍』までは、どつちかといふと、それは一切を包擁するといふ、きはめて謙虚な穏やかな宗教的態度であつた。だが、四十九歳を一轉機として、俄然、まるで、その性格が一變したと思はれるやうに、つよく嚴しい批判的態度にかはつたのである。その一つは南都の舊佛教を代表する徳一(得一)との宗教學上の論諍であり、他の一つは護命たちによつて代表される南都の佛教の戒律にたいする鋭い批判が、それを立派に裏書きしてゐるのである、まづ最初に徳一との宗教學の問題に關する論諍からのべてゆかうと思ふ。

そのまへに、一應説明しておかねばならなことは、さきにいつた、『大安寺の論諍』のことである。

さきにもちよつと觸れておいたやうに、弘仁六年の春、最澄は、九州の旅からかへると間もなく、和氣眞綱たちの懇請によつて、奈良の學者をまへにして、奈良の大安寺で、天台宗の哲學について、一場の講演を試みたのである。その講演は、これまでかつて一度も行はれたことのない、きはめて激しい闘争的なものであつた。

「巍々たる智龍は、重雲をおこし、赫々たる義虎は、厚氷を夏日に解けり。或は爭ふて學し、或は競ふて論じ、あるひは客作をよび、あるひは證文をもとむ。」

と、仁忠は『叡山大師傳』に、そのときの模様をしるしてゐるが、いづれにしても、最澄の南都の佛教、とくに、その代表者ともいふべき法相宗にたいする批判は實に嚴しいものであつた。龍攘虎搏、

互に雲をおこし、雨をふらす、きはめて眞劍な學問上の論諍が、このとき行なはれたらしい。しかも、これがきつかけとなつて、その前後の南都と北嶺、天台一乘教と、法相三乘教との對立的抗爭は、いよいよ烈しくなつたのである。もちろん、そこには、いくたの感情のもつれも、ないではないが、しかし、それは純學究的な立場の上にたつ、教學上の根本的な相違で、そこには何らの妥協はゆるされなかつたのである。

ところがである。この劃期的な、大安寺の論爭が、おはつて間もなく、寂澄の新宗教にたいして、正々堂堂と名乘をあげた敵手があらはれた。しかもそれは南都ではなくして、意外にも東國の片隅からであつたその名はたれあらう、筑波山の德一であつた。德一こそ、寂澄にとつては、又と得がたき好敵手であつ

た。當時わが國にならびなきこの德一が、とつぜんその前に現はれたことは、たしかに一つの驚異ではあつた。しかし寂澄にとつては、自分の學問を磨き、また新佛教の基礎を、固める上において、又となきよい機會があつた。『照權實鏡』『守護國界章』『法華秀句』をはじめ、心血を注いで數々の貴重の著述は、實はこの德一との論諍によつて生れたのである。くり返していふ。德一の出現こそ、寂澄にとつては、まことにめぐまれざる惠であつた。

こゝでちよつと讀者のために、一應說明しておかねばならぬことは、德一のことである。德一その人については、これまで明らかでなかつたが、最近、鹽入亮忠君の調査によると、彼は孝謙天皇の寵を賜つた藤原仲麿（惠美押勝）の息子で、幼にして奈良の興福寺修圓について出家し、爾來、奈良にあつて專心に佛教を研鑽してゐたが、二十有餘歲のをり、東國に赴き、筑波山と會津の慧日寺とを中心に、東北地方に六十餘の寺院を建立して、道俗を教化し、東國ではまるで菩薩のごとく、尊崇されてゐたのであつた。かつて寂澄が東國を行脚したをり、はたして彼とあふたかどうかは、疑問ではあるが、寂澄は德一の德風をきき、德一はまた新佛教の提唱者たる寂澄の行動にたいして、異常な關心をもつて、眺めてゐたに相違ないとおもふ。

かねて比叡山上に、一乘止觀の法燈を高く掲げて、鎭護國家をいのり、一切皆成佛の旗印のもとに、新佛教の建設に、ひたむきに精進する寂澄の雄々しい姿を、なんで彼が默つてみてゐやう？　彼はとほく東國の空から、ぢつと世間の動向を靜觀しながら、孜々として、新しい天台の教義を研究し、綿密に檢討し、そしてそれにたいする、鋭い辯駁の著述に專念してゐたのであつた。はたせるかな。それは『佛性抄』一卷となつて現はれた。かれはこの書物で、法相抄の立場から、佛性の問題を論じ、五性各別の說が正當であることを主張し、三乘教が眞實で、一切皆成佛を說く天台一乘教は、方便の說であることを、堂々と說いたのである。これにたいして、また宗澄は、弘仁八年二月始めて『照權實鏡』一卷つくつて、一切皆成佛を說く天台一乘の教は、大乘眞實の教へであり、五性各別を說く法相の三乘教は、方便の教へであることをのべて、鋭くこれを反駁したのであつた。

それ以來、兩雄ともに多くの書物をつくつて、互に『三一權實』の問題について、鎬を削つて爭ふたのであつたが、いづれも、その勝敗の結末をみずし

て、一方は承和二年十一月、七十六歳を以て、筑波山に示寂し、一方は弘仁十三年六月四日、比叡山において入寂したのである。

いつたいこの『三一權實』の問題、くはしくいへば一乘が眞實であり、三乘は方便であるか。それとも、三乘が眞實で、一乘は方便であるか、といふ問題は、けつしてわが國で、始めて起つた問題ではなく、すでに印度や支那においても、一時さかんに論議された問題であつて、それは支那の華嚴學者賢首によつて、一應すでに解決されてゐる問題なのである。それになぜ平安初頭の佛教界において、ふたたびそれが事新しく論議の俎上にのぼつたかといふに、それには實はかういふ事情があつた。

元來、奈良の佛教は、古來『南都六宗』といはれてゐるやうに、宗旨が六つにわかれてゐた。曰く、

倶舍、成實、法相、三論、華嚴、律の六宗である。ところでこのうち倶舍と成實の二宗は、ともに小乘佛教である。たとひ年分度者はゆるされてはゐるだが、倶舍宗は法相宗に屬し、成實宗は三論宗に附屬しておつて未だ獨立した形態はとつてゐなかつた。つぎに他の四宗は、いづれも大乘佛教ではあるが、教理として、哲學として、最もすぐれてゐたのは華嚴宗である。聖武天皇の東大寺大佛の建立は、まさしくこの華嚴の法門によつて、成されたのではあつたが、人物がなかつたといふか、教團の組織が悪かつたといふか、それとも僧綱所の幹部が、法相宗出の人の多かつた爲か、とにかく寂澄や空海の出た頃は、すつかり法相宗の人々によつて、日本の佛教界は、牛耳られてゐたのであつた。そんなわけで、たとひ哲學としては、すぐれたものであつても、天台と同じ一乘教である華嚴宗は、教界において、一向勢力はなく、いつも三乘教の法相宗によつてリードされてゐた。したがつて南都の佛教を代表するものは、まさしく法相宗であつた。

ところで三乘とか一乘とか、そしてまた三乘が眞實で、一乘は方便だとか、反對に一乘が眞實で、三乘が方便だ。などといふやうな問題は、おそらく讀者にとつてはあまり興味のないことかも知れない。しかし、佛教界において、きはめて重要なこのテーマも、成佛すなはち佛になるといふことを死ぬことだ。位に考へてゐる、今日の多くの人たちには、あまりに時代離れのした問題であらう。併し、

此問題を新しい感覺を以て見直すとき、何人もそこには人間性の價値は關する、いくたの貴い問題が示唆されてゐることを發見することとおもふ。といふのは、いつたい三乘とは、三つの乘物といふ意味で迷の此岸から、悟の彼岸へ運ぶ三つの乘物である。すなはち專門語でいへば、聲聞と緣覺と菩薩、これが三乘である。ふつうにこの聲聞と緣覺とを『二乘』といつてゐるが、二乘は常に小乘の代名詞として用ゐられてゐる。而もそれは自分一個人の迷を求めるのが目的であるから、大乘の人々からは、常に自利獨善、つまり個人主義だといつて、非難されてゐるのである。ところが、これにたいして菩薩といふのは、自利、利他、おのれの解脱と、ひとの救濟を、目的として修行するものであるから、それは個人主義ではなくて、全體主義といはれ、一體主義といはれるものであつて、それがいはゆる大乘である。法相宗のことを『三乘教』といふのは、要するに法相宗では、人間にはそれ〴〵先天的に三乘の區別があることを

認めて、大乘と小乘との併立をゆるす立場をとるからである。いまさらにこれを、佛性の問題、すなはち人間性の價値の問題からいふと、三乘教は勢ひ五性各別をとらざるを得ないのである。五性とは、無性有情と聲聞定性と緣覺定性と菩薩定性と不定性であるが、このなかで、後の二つは成佛する可能性がある。だが、前の三つは先天的に成佛の可能性を缺いでゐるから、どれだけ練成し、修行しても、よろしい佛にはなれないといふのである。

これが法相宗の立場、三乘教の主張する觀念である。これにたいして天台宗の立場、一乘教の主張はどうであるかといふに、端的にいへば『一切皆成佛』である。一切みな成佛といふものである。『一切衆生悉有佛性』である。一切衆生には、ことごとく成佛する可能性があるといふのである。けつきよく、『法華經』の示すやうに、

『唯有一乘法、無二亦無三』

である。これが天台宗の主張である。「唯だ一乘の法のみあつて、二もなく三もない。」といふのが、一乘教のたてまへである。したがつて天台一乘教の立場からすれば、三乘教は方便の教へ、一乘教は眞實の教へとなるわけで、三乘教は一乘教への道でしかない、といふことになるのである。しかもそれが、ちやんとハッキリと『如來出世の本懷、衆生成佛の直道』といはれる『法華經』に明示されてゐるのである。こんなふうに最澄はあくまで『法華經』を楯として、あたまから法相宗を駁撃してゐるのである。

かう簡單にいつてしまへば、この『三一權實』の問題は、兩雄互に血みどろになつて爭ふまでもなく、自然にその勝敗は決定されてゐ皆であるが、實際、專門學上の論爭になると、さうは簡單に片附けられないのである。法華經を立場とする天台宗ではさうたが、おなじ釋尊の說かれた『解深密經』に立脚する法相宗の見方には、またそれ相應のいひ分があるわけである。いづれにしても、南都と北嶺との學問上の抗爭は、最澄と德一との論爭によつて、いよ〳〵その幕はきつておとされたのであつた。なんといつても德一は教界の大先輩である。佛教學にたいする研究においては、あるひは最澄によりすぐれかてゐたも知れない。しかし最澄は、この教界の長老を向ふにまはして、つよい信念を以て、あくまで戰ひつづけていつたのであつた。

一五、新戒律の提唱

大乘戒壇の設立

『宗教には國境がない。だが、宗教を信ずるものには祖國がある。』

私はつねにこの言葉をスローガンとして、佛教を學び、佛教を行じ、佛教を說いてゐる。いふまでもなく佛教は、あまねく世界の人類を救濟せんとする世界的宗教である。したがつて、それはけつして一國、一民族を對象とするものではない。えに佛教は、印度のものでもなければ、支那のものでもない、況んや日本のものでもない。しかし、それゆゑにこそ、印度のものでもあり、支那のものでもあり、日本のものでもある。いや、それは全世界のもの、全人類のものである。けだし佛教を信ずる者には、いづれも祖國があるがためである。われ〳〵は、日本人として、佛教を信ずるものであつて、單なる人間として、佛教を奉ずるものではない。聖德太子が、すで

に十七憲法で道破されてゐるごとく、われ〳〵は、

『四生の終歸、萬國の極宗』

である佛教を、日本人として、日本臣民として信じてゐるのである。

『八紘を掩ひて宇と爲す』

といふ、全人類の救濟を念願とするこの『大乘の國』日本に、『み民われ』として、陛下の臣民として、生をうけた光榮ある日本人として、われらは佛陀の教へ、眞理の法を信じてゐるのである。したがつて、われ〳〵の信ずる佛教は、外來の佛教そのものではなくして、まさしくわが大和の精神によつて、攝取され、醇化され、淨化された佛教である。端的にいふならば、それは日本化された佛教、即ち日本佛教である。ゆゑに、われ〳〵は單なる佛教徒ではなくして、まさしく日本佛教徒である。しかも日本佛教徒であればこそ、アジアをよくし、ヨーロッパをよくし、全世界をよくする責務があるのです。しかし、ものには順序がある。一足飛びに、アジアを、ヨーロッパを、全世界を、よくすることはできない。まづ日本を、そして、アジアを、つぎにヨーロッパといふやうに、順序を追ふてゆかねばならぬ。自分の親を捨てゝおいて、他人の親に孝行する。自らの家内を愛せずして、ひとの妻を愛する。それでは主客が顚倒してゐる。順序が間違つてゐる。いや、それどころか、それは却つて秩序を亂すことになるのである。

われ〳〵は日本人として、あくまで日本を美しく立派にする。そのことがやがてアジアを、ヨーロッパを、そして全世界を、美しく立派にすることでなくてはならない。一君萬民の大和の國を、名實ともに

完成すること、一億一心の『大日本』の再建設こそ、まさしくわれらの歴史的使命でなければならぬ。

いまから千年も昔の日本人、世界といへば、唐、天竺、日本ぐらゐにしか考へてゐない、當時の日本人には、今日のわれ〳〵日本人が、現實に構想するやうな世界觀は、なかつたにしても、目覺めた日本人の意識のうちには、規模はたとひ小さくても、われらと同じやうな、いや、內面的にはむしろわれら以上な、大きい世界觀が把握されておつたとおもはれる。天下、國家といふ觀念は、多少、われらとちがつてゐても、日本的世界觀はハッキリ掴まれておつたやうである。かれらはいづれも、確乎たる日本的世界觀にもとづいて、國民的自覺のもとに、思想し、生活し、行動したのであつた。傳教大師最澄も、またその一人であつた。

彼ゐが獅子奮迅のいきをひで、身命を賭して、舊體制の南都佛教に對抗したのも、つまりは日本的自覺の下に、新しい佛教を建設せんがためであつた。すでにまへにものべたと思ふが、南都の佛教は、實をいふと、印度や支那そのままの佛教であつた。ただ、あちらのものを、こちらの土に、そのまゝそつと移し植ゑたといふだけであつて、そこには何ら日本的な獨自のものはなかつた。せつかく聖德太子が、日本人といふ立場から、國家的自覺のもとに攝取された佛教を南都の人達は、十分にそれを咀嚼し、理解し得ないで、只、徒らに傳來の佛教を、一から十まで、其儘鵜呑にしてゐたのであつた。

たとへていへば、ちやうど明治維新以來、ながい間、日本人が、日本人の正しい姿を、すつかり忘れてしまつて、ただもう歐米から來たものは、何でも

かでも、無批判に模倣し、攝取したのと同じである。『上等船來』『船來上等』といふ言葉が、ついこの間まで、國民の合言葉であつたやうに、歐米から海を渡つて來たものは、なんでも上等だといふ觀念が、ながい間、日本の社會を支配してゐたのである。

それとおんなじやうに、南都の佛教界の人たちは、みんな天竺や太唐から海を渡つて來た教へは、すべて完全なもので、これを取捨したり、その上にとかくの批判を加へることは、實に佛陀の教へを冒瀆するもののやうに、考へてゐたのであつた。現に南都佛教國の長老護命の如きも、最澄の新しい戒律の運動にたいして、

『最澄は、まだ唐都を見てゐない。ただ邊州にあつて、すなはちかへる。その說く所のものは、私說にすぎない。天竺や支那にその例をみない』

といつて反對にしてゐるやうなわけで、そこには、何ら『日本的自覺』の片鱗さへ、見出されないのである。

むろん、これに對して最澄は、堂々とその非難に報いてゐるのであるが、いづれにしても南都佛教は、依然として日本的自覺をもたない、舊體そのものであつた。

ではいつたいどういふ理由で、最澄は南都の教團に對して、宣戰の火蓋をきつたか。いや、きらざるを得なかつたか。といふに、それはすでに述べたやうに、大乘相應の地といはれる、この日本には、大乘と小乘とをならべ說き、成佛できるものと、成佛できないものがある。といふやうな、そんな生溫いハッキリしない佛教は適當しない。一君のもと、萬民ことごとく陛下の赤子である、この國には、一切皆成佛

を主張する一乘の教へが、最もふさはしいといふ、燃ゆるやうな信念から最澄は堂々と南都佛教に對して、それを撃滅せん許りの勢ひで立上つたのである。

しかし、それには、なんといつても、肝腎の宗教戰士をば養成せねばならない。その練成の道場を、比叡山に設けて、こゝでみつちり訓練しなければ『效果』がないといふ考へから奈良とは別に獨立した大乘戒壇を設立せんとしたのであつた。といふのは、これまで、社會の木鐸として、精神界の指導者たる僧侶になるには、どうしても一度は『受戒』といふ形式をふまねばならなかつた。しかもその場所は、奈良の東大寺か、筑紫の觀世音寺か、下野の藥師寺か、この三つの戒壇のうちの、いづれかに限定されておつた。しかし、この三つの場所は、いづれも小乘佛教に立脚して制定されたものであつた。

その上、小乘に規定する戒は、二百五十戒といふ、きはめて繁瑣なものであつた。純一の大乘佛教をつたへんとするものが、小乘の戒律の規定にしたがはねばならぬといふことが、そもそも間違つてゐる。と彼には考へられた。自利と利他、いや、利他のために、ひたすら精進する大乘の徒は、大乘の戒をうけねばならぬ。しかもそれにはどうしても大乘の戒壇が必要になつてくるのである。

それに亦二百五十戒そのものにしても、何らそこに絶對的な眞理性があるわけではない。佛陀が教團の秩序を保つためにやむを得ず。弟子たちの訓練上一應さだめられたものにすぎない。それに印度は印度、日本は日本である。民族がちがひ國土がちがひ風俗、習慣もちがつてゐる。日本人が、印度の人の眞似をせねばならぬといふ理由は、少しもない。

それからまた實際問題として、二百五十戒の一つ一つが、文字通りがたもてるものではない。口でこそ、師匠は弟子に『よくたもて』といひ、弟子は師匠に『よくたもつ』と答へて、ゐても、實際はその肝腎の師匠にも、弟子にも、それはよく守られてゐないのである。ただ形式だけで、内容の一向に伴はぬものを、後生大事と、いつまでもそれに拘はてゐることは、馬鹿〳〵しいことである。もつと生命的なもの、本質的なものを掴んで、戒律の精神を生かしてゆく、それが佛陀の眞意に叶ふことであり、またわが國の佛教界を革新すべき一乘佛教のもつ歴史的役割だと、かういふ風に最澄は考へた。

そんなわけで南都への挑戰の第一歩として、彼は、山上の弟子たちに、これまでたもたれてゐた、小乘戒の廢乘を宣言し、そして直ちに小乘の人たちのもつ、鐵鉢を捨てて、大乘の人々のもつ、木鉢に代へてしまつたのである。

かくて五十二歳の春、弘仁九年二月七日、まさしくその闘ひの第一矢は放たれた。『山家學生式』くはしくいへば『天台法華宗年分學生式』が、それである。その最初に次のやうな文句がしるされてゐる。

『國寶とは何物ぞ。寶とは道心なり。道心ある人を名づけて國寶となす。

故に古人のいはく、『徑寸十枚これ國寶にあらず。一隅を照らす。これすなはち國寶なり』と。

古哲またいはく、能く言ひて行ふこと能はざるは『國の師』なり。能く行ひて言ふこと能はざるは『國の用』なり。能く行ひ能く言ふは『國の寶』なり。

三品のうち、ただ言ふこと能はず、行ふこと能はざるは『國の賊』となす。

乃ち道心あるの佛子、西には菩薩と稱し、東には若子と號す。惡事を己に向け、好事を他に與へ、己を忘れて、他を利するは慈悲の極なり。

釋敎のうち、出家に二類あり。一つには小乘の類、二つには大乘の類なり。道心あるの佛子、すなはちこれこの類なり。

今わが東州、ただ小像のみありて、いまだ大類あらず。大道いまだ弘まらず、大人興りがたし。

誠に願くは、先帝の御願、天台の年分、永く大類となし、菩薩僧となさん。』

なんといふ堂々たる宣言であらう。

『わが國には、ただ小像(小乘の人)のみあつて、いまだ大類(大乘の人)なく、大道(大乘の道)いまだ弘まらず、大人(大乘の人)興り難し』

といふ大膽な言葉は、まつたく天下を呑むの慨ありといふべきである。

尤も『學生式』には、六條式、八條式、四條式の三種類あるが、それはいづれも、そのうちに記された、條項によつて名づけられてゐるのである。即ちはじめ弘仁九年の夏、朝廷へ上表せられたものを『六條式』とよんでゐる。それはその内容が六ケ條から成つてゐるから、さういはれてゐるのである。この『六條式』のうちには、天台宗の學生を養成する指導精神と、その教育の實施方法がしるされてゐるのであるが、その眼目は、道心ある菩薩、君子を養成したいといふのである。つまり國家の人材、つまり大乘的人物を比叡山でつくり出したいといふのである。しかも、それには十二年間、みつちり山上で、實際に學

問、修行せしめ、卒業の曉には、それを全國の各地へ派遣し、大いに國家のために働かせようといふのである。それが最澄の教育方針なのであつた。

ところで、こゝでちよつと注意すべきことは、『國寶』と『國師』と『國用』といふことである。いつたい人間には、それ〴〵もつて生れた天分といふものがある。人によつて個性は、みんな違つてゐる。おなじに學問をしても、みんな一樣に學者になれるものでもなければ、また立派な人間になれるものでもない。『よく言ひ、よく行ふ』といふ國寶的人物は、容易には出ないのである。最澄はこの點を顧慮して、叡山の卒業生を三種類にわけたのである。そして學問も修行も、ともにすぐれた人物を『國寶』とし、これを比叡山に留めて、人材の教養にあたらせようとしたのである。つぎに學問はすぐれてゐるが、まだ修行の方はどうかと思ふ人物は、これを『國師』と名づけ、さらに學問はできないが、しかし修行の方はすぐれてゐるといふ人物を『國用』と稱し、これらをそれ〴〵諸國へ派遣し、國分寺に住まはしめ、もつぱら地方の精神的指導の任にあたらしめようとしたのである。これについて『六條式』の最後にかういつてゐる。

『およそ、國師、國用は、官符の旨によりて、傳法および國講師にさし任ぜよ。その國講師一任のうち、毎年安居の法服の施料は、すなはち當國の官舍に納め、國司、郡司、相對して檢校し、まさに國裏の池を修め、溝を修め、荒れたるを耕し、崩れたるを理め、橋をつくり、船をつくり、樹をうゑ、綿を殖ゑ、麻を蒔き、草(藥草)を蒔き、井をうがち、水を引きて、國を利し、人を利するに用ふべし。經を講じ、心を修めて、農商を用ゐざれ、しかるときは、則ち道心の人、天下に相續し、君子の道、永代に斷えざらん』

この抱負の一端をみても、彼がいかに教界革新の熱に燃えてゐたかがわかるのである。

だが、かうした最澄の念願も、容易にきき屆けられなかつた。尤も朝廷が、最澄の劃期的なこの運動を、聽許あらせられなかつたのには、いろ〳〵の事情もあるだが、その重なる原因は、なんといつても南都佛教家のさかんな反對であつた、なぜ、反對した？　それをこゝで再びくり返して說明するまでもない。北嶺の勃興は、そのまゝ南都の衰微である。今では、まつたく正反對の位置にある南都が、極力その反擊に出でたことは、むしろ當然である。そんなわけで朝廷への熱心な請願も、いつかうその效を奏しなかつたのである。

だが、そんなことで素志を翻へすやうな最澄ではなかつた。かれはさらに、その年の八月二十七日、『八條式』くはしくいへば『勸奬天台宗年分學生式』をつくつて、朝廷へ奉つたのである。その內容は、八個條からできてゐるが、それはつまり『六條式』の細則である。

『以前の八條の式は、佛法を住持し、國家を利益し、群生を接引し、後生をして善に進ましめんが爲なり。謹んで天裁を請ひたてまつる。謹で言す。』

と、その中にしるしてゐる。

しかし、天裁は容易に下らなかつた。朝廷は、なかなか大乘戒壇の獨立をゆるされなかつた。一方、南都の反對は、ます〳〵強くなる、烈しくなる。ともすると、かれの念願はその根柢から覆へされさうな形勢である。最澄は全く氣が氣でない。弟子の光定（一心戒文の著者）をして、たび〳〵政府の要人を、說破せしむべく努力したが、一向にその驗がない。

弘仁十年、歲の改まると共に、三たびかれは『四條式』くはしくいへば『天台法華宗年分度者回小向大式』をつくつて、朝廷へ請願したのである。それは南都で行はれてゐる小乘の戒律と、比叡で行はんとする大乘の戒律との相違を、はつきりと四ケ條に亙つて區別し、そして峻烈に南都佛敎を批判したものである。

『およそ佛戒には、二つあり。一つには大乘の大僧戒なり、十重、四十八經戒を制して、もつて大僧戒となす。

二つには小乘の大僧戒なり。二百五十等の戒を制して、もつて大僧戒となす。』

と、『この四條式』のうちにしるされてゐるが、その最後に、最澄は、

『伏して乞ふ。陛下この弘仁の年より、新にこの大道を建て、大乘戒を傳流して、今より後を利益したまへ。謹で天裁を請ひたてまつる。謹で言す。』

と、結んでゐるが、いつたい、最澄が、南都の戒律

にたいして、新しく北嶺の戒律を提唱したのは、なにも『戒』そのものの價値を、全く無視したり、またそれを頭から否定しやうといふのではない。戒をたもてぬ『無戒』の僧侶は、事實認められない筈である。名は佛戒であつても、何人もたもたねばならぬ戒と、たもたなくてもよい戒とがある。最澄によれば、小乘戒はたもたなくてもよい戒であり、これにたいして大乘戒は、出家といはず、在家といはず、何人もぜひともたもたねばならぬ戒なのである。ではその大乘の戒、最澄はこれを『圓頓戒』とも、亦『圓頓菩薩戒』ともいつてゐるが、それは『四條式』にあるとほり『梵網經』に說くところの『十重四十八經戒』である。其一々をここで說明する暇もないし、また徒らに讀者を惱ますばかりであるから、その說明は略しておくが、その內容は、けつきよく次の三つである。即ち一つには攝律儀戒、二つには攝善法戒、三つには攝衆生戒がそれである。いひかへれば、第一は惡いことをするなといふ戒、第二は善いことをせよといふ戒で、つまりそれは自己反省であり、自分みづからの練成の捷である。第三は衆生を救ひ導くといふ戒である。佛敎の術語でいへば、最初の二つは自利の行、後の一つは利地の行である。この自利と利他、自覺と覺他の行に精進する人が、いはゆる大乘の菩薩である、したがつてかうした意味で、大乘とか、菩薩戒とか、又は圓敎（天台宗）の戒であるから、これを『圓頓戒』などといはれてゐるのである。最澄はこの大乘の圓頓戒の確立のためには、まつたく身命を賭して、日本のために、日本佛敎のために、徹底的に南都の人々と戰つたのである。しかし、不幸にして、それは彼の生前中には、たう

とう認可されなかつた。が彼は、弘仁十年十月、『顯戒論』三卷をつくり、さらに十二月、『内證佛法血脈譜』一卷を製して、四たびも、五たびも上奏に及び勅裁を仰いだが、その努力はつい空しく終つた。血みどになつて戰つた彼の勞苦も、つひに、存命中にはむくはれなかつた

だが、弘仁十三年六月十一日、やうやくして最澄の久しい念願であつた、この大乘戒壇の設立は、ゆるされたのであつた。ただし、それは彼の歿後七日目であつた。

一六、入　滅

弘仁十三年の春三月、大乘戒獨立の運動をおこしてから五年目、最澄はつひに病床に臥する身となつ

た。永年に亙る身心の疲勞によつて、彼はすつかり健康を害してしまつたのである。四月に入つても、病は一向に快くならないどころか、かへつてだんだん悪くなるばかりである。

『自分のいのちも、もはやさう長くはない。』

と、氣づいた最澄は、もろ〳〵の弟子たちを、枕邊へよびよせた。そして懇ろに遺言をしたのであつた。

『叡山大師傳』の著者は、そのときの有様を、かうしるしてゐる。

『弘仁十三年四月、諸弟子に告げていはく。わが命久しく存せじ。もしわが滅後に、みな俗服を著くること勿れ。

また山中の同法、佛の制戒によつて酒をのむこと勿れ。

もしこれに違ふことある者は、わが同法にあらず。また佛子にあらず。早速に擯出して、山家の界地をふましむることを得ざれ。もしくは合藥のためにも山院に入ることを得ざれ。

また女人の輩を、寺側に近づくることを得ざれ、いかに況んや院内清淨の地をや。

毎日もろ〳〵の大乘經を長講し、慇懃精進して、法をして久しく住せしめよ。

國家を利益せんがため、群生を度せんがためなり。努力よや、努力よや。

わが同法等、四種三昧を懈怠することなかれ。かねて年月に灌頂し、時節に護摩し、佛法を紹隆し、以て國恩にこたへよ。

ただ、われ鄭重に、この間に託生して、三學を修學し、一乘を弘通せん。

もし心を同ふする者は、道を守り、道を修め、相思ひあひ待て。』

國家をおもひ、佛法をおもひ、叡山をおもふ、その切々たる心情は、つよくわれらの胸をうつ。その内とくに、

『われ鄭重に、この間に託生して、三學を修學し、一乘を弘通せん』

といふ言葉は、實に宗教的聖者ならでは、とうていロにし得ぬことばである。

いふまでもなく『鄭重にこの間に託生する』とは、いくたびも〳〵この日本に生れ來て、といふことであつて、いひかへれば、それは七生報國の信念である。七たび生れかはつて、眞理の法門を弘めて、國恩に奉答しやうといふ、この最澄の心こそ、そのままわれら日本佛教徒の信念でなければならぬ。

さらに最澄は、住山の諸弟子にたいして、

『われ生れてよりこのかた、口に麁言なく、手に笞杖なし。いまわが門法、童子を打たずんば、わがために大慰なり。努めよや、努めよや。』

なんといふ慈愛のこもつた情ぶかい言葉であらう。瀧谷玉のごとき最澄の風格が、しみ〴〵としのばれる。

最澄はこゝろざしを繼げて、さらに山上の修道生活について、細々と注意した。それは主として衣・食・住に關するいましめであつた。それは六條からなる遺誡であつた。

一つには定階、二つには心の用心、三つには充衣、四つには充供、五つには充房、六つは充其臥具。

此六條の遺誡は古來『禪庵式』と名づけられてゐる。

その第二の『心の用心』のうちには、次の言葉がしるされてゐる。

『はじめに如來の室に入り、次に如來の衣を着し、次に如來の座に坐せよ。』

これは法をつたへる者の心構へとして『法華經』に說かれてゐる『衣座室の三軌』である。いふまでもなく、如來の室に入るとは、何人に對しても、つねに慈悲の心をもつて接することである。如來の衣をつくるとは、忍辱（堪忍）の心を堅持して、ぢつと堪え忍ぶことである。如來の座に坐すとは、空（平等）の眞理をさとつて、世間の實相をあきらめることである。したがつて、この三つのいましめは、何人にも、必要な練成の心構へであるが、とくに法を傳へ、法を弘める者には、一日も忘れてはならぬ心得である。それを最澄は、臨終に際して、改めて弟子たちに詞々と訓へたのである。

四月十九日、最澄は、當時二十九歲の弟子圓仁（慈覺大師）を、親しく病床に招いて、天台宗の眞髓、『一心三觀』の妙法をつたへた。

こえて五月十五日、さらに義眞をよんで、手づから比叡山の私印を授け、ねんごろに後事を託した。義眞はかつて入唐求法のをり、通譯として伴ひ、海を渡つて、ともにつぶさに苦難をなめた愛弟子である。したがつて最澄にとつては、なんといつても數ある弟子のなかでも、一番眞になる可愛い弟子である。最澄が義眞に與へた『付囑の書』には、次のやうな文句がしるされてゐた。

『最澄、心形久しく勞して一生こゝに窮る。天台の一宗は、畏くも桓武天皇の公驗による。今よりのちは、一山悉く義眞の指導にしたがつてゆけ、一家の學生たち、一事をも背くこと勿れ。』

臨終の時刻は、だん〴〵迫つてくる。最澄はさらに光定を枕邊ちかくよんだ。そして嚴かに、かういつた。

『わが滅後、わがために佛像をつくることなかれ。わがために經を寫すことなかれ、ひたすらわが志をのべよ』

と、光定は、師匠の命を受けて、しば〴〵京都と叡山との間を往復し、身命を賭して、大乘戒壇の設立に獻身した弟子である。

弘仁十三年六月四日、辰の刻、一世の大阿闍梨最澄は、溫然と、つひにこの世を去つた。

『心形久しく勞して、一生こゝに窮まる。』

といふ、きはめて悲痛のことばをのこして、つひに五十六歲を一期として、涅槃の雲にかくれたのであつた。

かねて覺悟はしてゐたことであつたが、とりのこされた弟子たちの哀傷は、げにいたしいかぎりであつた。わけても義眞、光定の悲歎が、どんなに深いものであつたかは、あへて想像に難くない。

『日隱れ、炬滅して、憑仰するところなし。風は慘み、松は悲しむ。泉は舛り、水は咽ぶ。』

と、『叡山大師傳』の作者は、その時の模樣を描いてゐるが、おそらくそれは眞實をうがつた言葉であらうとおもふ。

弘仁十三年六月十一日、阿闍梨の初七日の忌日にあたり、畏くも大乘戒壇勅許の恩命は、つひに降つた。かくて。阿闍梨最澄の努力は、やうやくにして報はれたのであつた。

その年の十一月、畏くも嵯峨天皇は、御製の輓詩を廟前に賜ふた。

哭澄上人

吁嗟雙樹の下　攝化如々に契ふ
慧遠の名猶ほ駐る　支公の業已に虛し
草は深し新廟の塔　松は掩ふ舊禪居
燈焰空座に殘り　香煙像爐を繞る
蒼生橋梁少し　緇侶律義疎なり
法體何んぞ久しく住せん　塵心傷むに餘あり

貞觀八年七月十二日、この日、朝廷は最澄に、『傳敎大師』の謚號を賜つた。その勅書にいはく、

『勅す。道の高き者は、光榮自ら遠く。德の盛なる者は、號謚必ず彰る。舊章の存する所、眞俗異ならず。故天台の本師最澄、遠く重溟を涉り、深く一乘を求む。慈雲を西極に引き、法雨を東岳に注ぐ。世初めて波利の平路を知る。人誰か矯奢の美衣を着せん。滅度年深しと雖も、遙かに虛空の墮淚を聞く。興隆日に就き、近く景藥の揚輝を見る。飢に渴注の誠を篤くす。何んぞ追崇の典を空しうせんや。宜しく法印大和尙位を贈り、仍て諡して傳敎大師と號すべし。』

滅後四十五年、最澄　つひに傳敎大師になつた。一つねに聖恩をおもひ、全生涯を、天台一乘の興隆に捧げた最澄は、こゝに聖者傳敎となつたのである。

最澄は死んだ。五十六年を一期として、永遠にこの世を去つた。だが、聖者傳敎は、千年の後、今もなほ生きてゐる。比叡の山と共に、天台の法門とともに、いや、天壤ときはまりなきわが皇國、大日本とともに、傳敎大師はいつまでも〳〵生きてゐるのである。」

空海と最澄

出文協承認ア110,100號
發行部數 23,000部

昭和十七年十月十五日印刷
昭和十七年十月十五日發行

定價一圓八十錢

著者 高神覺昇 東京市小石川區小日向臺町一ノ四一
發行者 高島政衛 東京市小石川區小日向臺町一ノ四一
發行及賣所 合資會社 潮文閣 東京市小石川區東古川町一〇 電話大塚(86)六二四八・六四三五 振替東京一七四四三番 會員番號二一七五〇六番
印刷所 中外印刷株式會社 代表者 渡邊一郎 東京市神田區淡路町二ノ九
配給元 日本出版配給株式會社

991
220

終